

日本における「バスケットボールの普及」 ~The Study on “The Spread of Basketball” in Japan~

1K03B175-1 真鍋なつみ

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 間野義之 先生

1 研究の動機・目的

現在日本において、バスケットボールは人気があるとは言えないスポーツである。学校体育で教材として取り扱われていることにより、ほとんどの日本人はこの競技について何らかの知識や経験は持っているだろう。しかし学校から離れたところでは、それを「する」環境も「観る」環境も決して充実しているとは言えない現状である。これは筆者自身が学校部活動から離れたときに実感したことだ。この現状をどうにか改善し、近年著しい人気を博してきたサッカーのように、バスケットボールで国全体が盛り上がるような社会を作るために何かできることはないかと考えた。そこで本論文では、日本の「バスケットボール普及」に今何が必要なのかを明らかにし、それを提案することを目的とした。

2 各章の要約

第1章 「スポーツの普及」とは

一般的にものごと「普及」ということは、「広く一般に行きわたること、また、行きわたらせること」（広辞苑）である。しかしその「一般的な普及」と「スポーツの普及」には、何らかの違いがあるのではないだろうか。そこで本章ではこの 2 つの違いに対して問題提起をしたうえで、いくつかの例を挙げて考察し、本論文における「スポーツの普及」を定義づけた。その定義づけには、現在「スポーツの普及」が進んでいると考えられるサッカー、「甲子園」・「箱根駅伝」、プロ野球、および陸上、水泳、バレーボールの各世界大会などを例にした。これらそれぞれが「普及」した背景・原因別に考察した結果、本論文における「スポーツの普及」には、「文化」と「ビジネス」の 2 つが存在していることであると定義した。

第2章 日本で「スポーツの普及」が進んでいない理由

日本人のスポーツ観を知るために、スポーツが日本に伝来してから、どのように広まり現在に至ったのかを調べた。その歴史のなかでも、特にスポーツと体育が同一視されたことから生まれた「スポーツは学生時代までのもの」という意識、およびアマチュアリズムによるスポーツ産業という発想の遅れが主な原因であることを明らかにした。そして企業スポーツを母体としてスポーツが発展してきた歴

史についてまとめた。学校部活動が選手育成の場であり、そこから企業スポーツをトップゾーンとしてプレーするという流れによる競技レベル向上の限界や、企業にマネジメントのすべてを頼ることの危うさから、企業スポーツの限界が見えてきた。

第3章 スポーツの強化・育成システム

第1章と第2章より、さまざまな日本スポーツの問題点のなかでも、特に重要かつ急務であるのが、競技レベルの向上、選手育成・強化であるという考えに至った。そこでここでは、強化・育成に成功しているシステムの例を 3 つ取り上げた。まずは日本における成功例として J リーグの選手育成システムについてまとめた。またバスケットボールの強化について、イタリアのベネントレヴィンバスケットボールクラブと、アルゼンチンの強化・育成システムを調査した。ベネントレヴィンはイタリアセリエ A で活躍するチームであり、アメリカ NBA に過去多くの選手を輩出している。またアルゼンチンは、1984 年から強化・育成プログラムをスタートさせ、約 15 年で世界レベルの実力に到達した。その結果、3 つすべてが一貫指導システムをとっていることがわかり、このシステムの重要性と可能性が明らかになった。

第4章 日本の「バスケットボール普及」のための提案

現在日本のバスケットボール界には、世界との明確な実力差、世代間による実力の空洞化、次世代の有力選手の不在といったさまざまな問題が存在する。これらを解消するために一貫指導システムが有効であることを明らかにした。また一貫指導には技術だけでなく、人間形成の場としての可能性も秘めていることを考え、システムのなかにスポーツの技術だけでなく、社会貢献などのプログラムを組み込むことも提案した。しかし日本特有の伝統や文化により、歴史あるものを完全に排除し、斬新な考えをいきなり導入するような方法はなかなか受け入れられない。また筆者自身、部活動を完全に否定するべきかどうか結論が出ていない。ゆえに「バスケットボール普及」のために、1 つの可能性として一貫指導システムの導入を提案することを本論文の結論とした。